

しいの実

第5号

鈴鹿市立鈴西小学校

学校教育目標「仲間と関わり合いながら確かな学力と人権感覚を身に着け、たくましく生きる子の育成」

■「確かな学力を身に着ける子」の育成を目指して

第1号（4月11日発行）でもお知らせしたところですが、鈴西小では、学校教育目標にかかわるめざす子ども像の一つとして、「確かな学力を身に着ける子」を掲げ、仲間と関わり合いながら粘り強く課題を解決していく子どもを育てようと教職員が統一感をもって研修を重ねています。こうした子どもを育てるため「対話」及び「主体性」を大切にした授業を展開しています。ここでは、「対話」及び「主体性」を大切にした授業とはどのようなものか、4年生の算数をモデルに紹介します。

めあては「九九を使えないわり算の計算のしかたを考える。」です。

② 次に、 $80 \div 4$ の解決方法について、考えていきます。まず、どうやったらできるのか、一人一人が考える時間を設けます。子どもたちは①の活動で思い出した3年生までの学習内容をヒントにして解決方法を考えます。

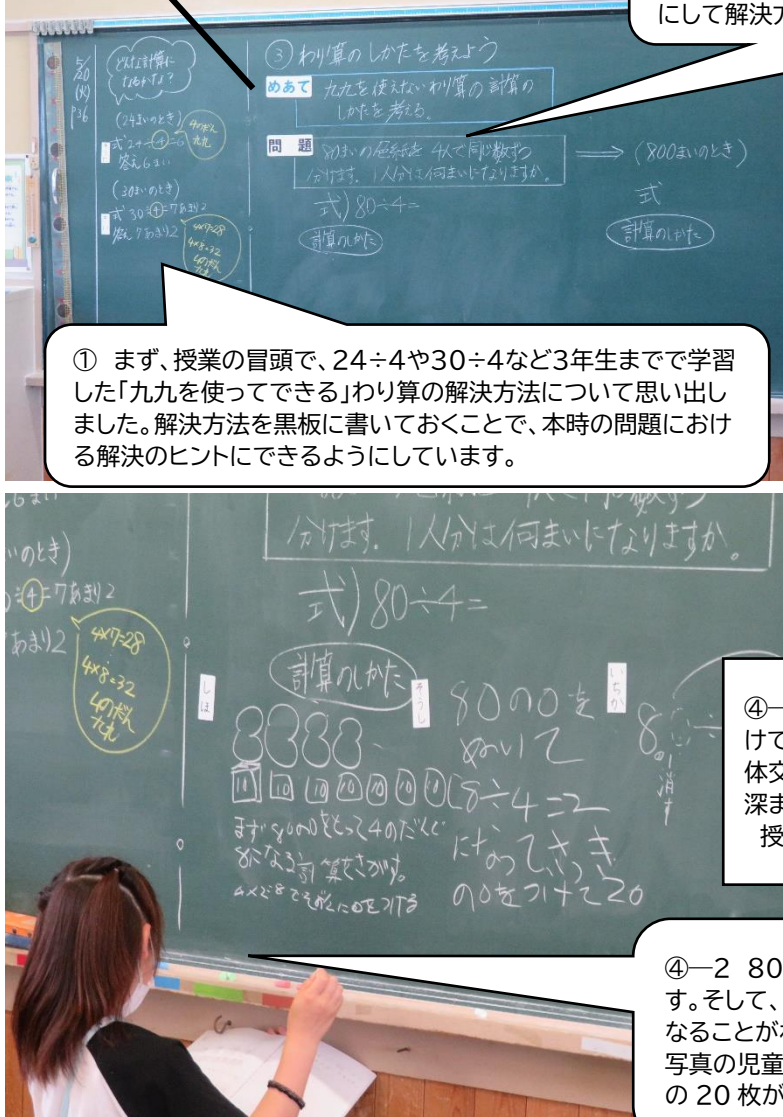
① まず、授業の冒頭で、 $24 \div 4$ や $30 \div 4$ など3年生までで学習した「九九を使ってできる」わり算の解決方法について思い出しました。解決方法を黒板に書いておくことで、本時の問題における解決のヒントにできるようにしています。



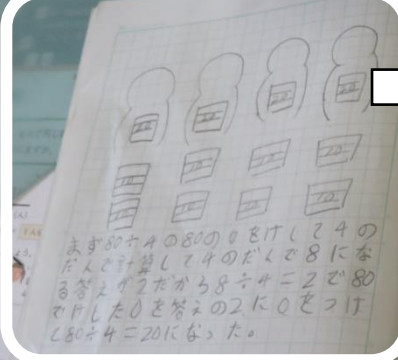
③ 自分で考えた解決方法について、周囲の仲間と考えを交流します。
ここで子どもたちが、自分と違う解決方法を知って考えを拡げたり、解決方法がわからない子が解決方法を知ったりすることができます。
授業で大切にしている場面の一つです。

④-1 自分で考えた解決方法について、周囲やグループだけでなく、クラス全体に伝えます。周囲との交流に加えて全体交流をすることで、子どもたちの考えが、さらに広がり、深まっていきます。
授業で大切にしている場面の一つです。

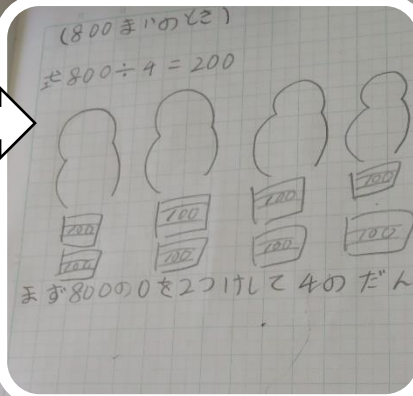
④-2 80を10の束8つと考え、4の段で8になる数を探しています。そして、 $4 \times 2 = 8$ となることから、10の束が1人当たり2つになることがわかり、 $80 \div 4$ の答えは「20」となることを突き止めます。写真の児童は、文章の説明に加え図を書くことにより10の束2つ分の20枚が一人分になることを説明することができています。



80÷4の解決方法をまとめたもの。



800÷4の解決に取り組んでいるところ。



⑤ クラスの仲間との交流によって、80÷4の解決方法を学習した子どもたちは、学習したことを基に「800÷4」の問題の解決に挑戦します。この児童は、左のページに整理して書いた「80÷4」の解決方法をヒントにして、「800÷4」の問題に取り組もうとしています。

ノートを丁寧に書くことで、次の問題の解決に向けた活動に取り組みやすくなっていることがわかります。

4年生の子どもたちは、ただ、先生の話を受け身で聞いて学習するのではなく、3年生までに学習したことをヒントに、自分なりに解決方法を考え、考えたことを仲間と交流しながら理解を深めています。

このような「対話」及び「主体性」を大切に授業スタイルを継続発展させることにより、「確かな学力を身に着ける子」を育てていきたいと考えています。

それぞれのご家庭でも、子どもたちが考えをもち、周囲と交流できているか等についてお話してみてください。

■今年も「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」頑張ってます。

今年も「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の取組に全校で元気に取り組んでいます。特に高学年は、自分たちの記録だけでなく、1年生など低学年のお手伝いもしなければなりません。今回は6年生が自分たちの記録をより良くするとともに、1年生のお世話をよりスムーズに進めるため、準備を頑張っている様子をお伝えします。

小さくてわかりにくいですが、1mごとに整然と並び、ボールを投げる子に注目することができています。



投げる子は、投げる前に「行きまーす」と声をかけ、周囲も「はい」と反応できています。このことにより、全員がボールの行方に集中し、安全で正しい記録ができる活動につながっています。



仲間が前向きな気持ちになるよう、待機している仲間が声掛けをしてくれています。



6年生の子どもたちは、ボールが体にあたってしまう等の事故防止や、1年生の投げるタイミングがわかりやすくなるようにする等の観点から、声掛けや返球の手順について細部に至るまで確認することができていました。

ここまでしなくても、調査は実行できるかもしれませんが、様々な場面を想定して自分たちなりに良い進め方について考えることが、子どもたち同士の「対話」や他者意識の向上につながります。そして行事を行うことによる子どもたちの成長につながると考えます。

今後も、「行事をこなす」のではなく、子どもたちの成長へのつながりを意識して実施していきます。